

日本のリンゴ自給率。そもそも、リンゴ果汁は、2014年で56%と、1984年以前は輸載で日本へのリンゴ輸入は、1984年以前は輸載で日本へのリンゴ輸入は、1984年以前は輸入を認めていなかったため、リンゴの自給率は100%だった。それが、当時のGATT（関税及

# 5万トン時代へ 青森リンゴ輸出

34

と報告した。なぜ自給率が低いのか不思議に思われる方もいるだろう。実は、国はリンゴ果汁として輸入されているリンゴを生果換算して自給率を算出しているのだ。

び貿易に関する一般協定、現在のWTO）裁定で自由化が勧告され、90年から実施された。90年のリンゴ果汁輸入量は生果に換算して27万3千トで、それから順次

## 国内生食価格にも影響

増加し、94年には52万5千トと50万トを超え、近年は60万ト台後半で横ばい状態にある。

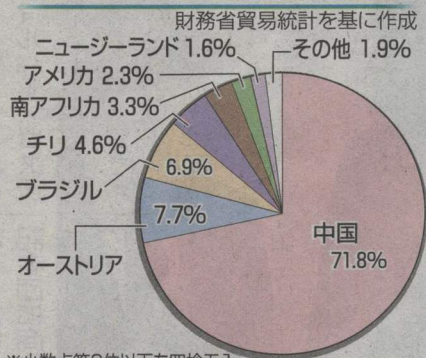
2014年の輸入量は67万400トと国産リンゴの8割近い水準にある。07年は、国産を上回る92万4千トだった。

リンゴジュースは、加工向けを増やして生食用の価格暴落を防いできた。

しかし、輸入リンゴジュースの増加によって本県が独自に需給調整をリードすることが難しくなっている。

## 輸入果汁の増加

リンゴ果汁の国別輸入割合(2014年)



※小数点第2位以下を四捨五入したため合計は100%にならない

飲料の原料 お酒、炭酸 国は10月に、すべての

加工食品の原料原産地表示を義務付ける方針を示した。これまでリンゴジュースは原産地を表示していなかったもので、知らないうちに中国産ジュース(2014年の輸入シェア71・8%)を飲んで

青森リンゴにとって加工向けは、生食用リンゴの価格維持に大きな役割を果たしてきた。豊作年は加工向けを増やして生食用の価格暴落を防いできた。

青森リンゴにとって加工向けは、生食用リンゴの価格維持に大きな役割を果たしてきた。豊作年は加工向けを増やして生食用の価格暴落を防いできた。

改めて国産リンゴジュースの品質や安全面の優位性で国産加工向けを回復させ、加工リンゴの果たした需給調整機能を取り戻してほしい。併せてリンゴ輸出も加工向けのそうした機能をサポートしたいものだ。

(県りんご輸出協会事務局長 深澤守)